



Title	エイジング心理学ハンドブックの翻訳から見えてきたこと
Author(s)	藤田, 綾子
Citation	生老病死の行動科学. 2007, 12, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8305
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エイジング心理学ハンドブックの翻訳から見えてきたこと

藤田綾子

高齢者の心理学を学ぶ者にとって、バイブルのように研究の指針を示してくれる参考書の一つが「**Handbook of the Psychology of Aging**」(ed. J.E.Birren & K.W.Schaie)である。

このハンドブックは「**Handbook of the Biology of Aging**」と「**Handbook of Aging and the Social Sciences**」の3巻のエイジングに関するシリーズとして出版されてきた中の1巻である。

第1版が出版されたのは1977年である。第2版が1985年、第3版1990年、第4版1996年、第5版2001年、第6版が2006年に発刊されたので、第1版から30年が経過したことになる。

高齢者の心理学を学ぶ者にとって、いずれも最先端の研究の流れを知る上で重要な参考書の一つであるが、とりわけ「**Handbook of the Psychology of Aging**」は基本になるシリーズである。

このたび、筆者らは(大阪学院大学・山本浩市氏と共同)、「**Handbook of the Psychology of Aging**」第6版の翻訳権を得て、現在多くの方々の協力のもと翻訳作業が終わり、2008年早々には北大路出版社から発刊できることになった。このハンドブックの発行は第1版から監修を続けてきたJ.E. ビリンとK.W. シャイエが80歳を超えていることから、第6版で終わりになる可能性があるということであり、ハンドブックの翻訳は、第1版が出版されたときからの筆者の願いであったので叶えることができホッとしている。

その作業の中で第1版から第6版までの目次を見ていると、この30年あまりの高齢者の心理学についてのテーマの流れが見えてくる。というのは第1版からの監修者であるJ.E. ビリンとK.W. シャイエが、各巻での編集にあたっての方針として、「既版の単なる更新ではなく」「新しい観点を提示し」「最新性を保つこと」であったと述べているように、その時々々の社会のニーズと最新の研究を紹介することが心がけられている。

全版を通して、I部 エイジング心理学の基本的なコンセプト、研究デザインについて、II部 行動のプロセス、III部 生理的な課題、IV部 社会的な課題、V部 介入の問題と一貫して大きく5ブロックで構成されている。

I部の中で「エイジング心理学のコンセプト」についてはビリンが、「研究デザイン」についてはシャイエが必ずと言って良いほど、単著あるいは共著で関わっていることから、エイジング心理学を研究する上で特に大事にしていることが強く伝わってくる。

ビリンは、高齢者研究のあらゆる分野について造詣が深く、シャイエは高齢者研究の重要な方法論としての縦断研究を着実に続けながらその方法論を確立していくプロセスの中で、知能をはじめ様々な現象を発見してきている。二人の研究姿勢はビリンが広がり、シャイエが深さを追求するという絶妙な組み合わせがこのハンドブックを同じ編者で30年間にも渡って、第6版まで出すことができた原点があるように思える。(ここで少し宣伝をしておく、2009年3月にシャイエを迎えた高齢者研究の方法論に関するワークショップを本研究科で行う予定である)。

Ⅱ部は、いわゆる各論ともいべき項目が含まれている。視覚、聴覚、記憶、学習、運動学習、モチベーション、パーソナリティ、精神病理がエイジングによってどのような影響を受けるのかという話題であり、その時々における最先端の業績が紹介される。しかし、知能についての項目は第4版までで終わる。後は代わりに知恵、言語、モーターパフォーマンスのようにより生活実態に近い取り上げ方になり、高齢期の知的な働きが「知能」という枠組みを超えて、経験を重ねていることを踏まえた理解の方向に変化している。感覚のうち視覚は第6版まで残るが聴覚は5版まで（因みに第6版の目次予定を出版前に見せてもらった際には「視覚と聴覚」という章がたてられていた。第6版の視覚の章の著者は、聴覚が重要でないから記述していないのではなく自分が視覚しか書けないからだと弁解しているので、編者としては聴覚を第6版でも削る予定はなかったものと思われる）、触覚・嗅覚・味覚については初版で取り上げられて以来消えてしまっている。確かに我々の外からの情報収集は視覚と聴覚で8割以上をまかなっているといわれるので、そのような章立てになるのは仕方がないが、高齢期の情報収集は現実には聴覚や視覚が低下した部分を触覚・嗅覚・味覚で補っている。つまり、感覚の全てを動員しながら判断を下していると考えられるので、高齢期の生活にとっては重要な影響力を持っている。最新版での特徴は、反応速度、注意、認知の章である。これは知能が智恵や言語、モーターパフォーマンスのように変化しているのと同様に、知覚と大脳と反射の組み合わせとしての行動のプロセスに注目しようとする潮流であろう。

Ⅲ部の生理的な課題は、エイジングに影響する遺伝子、大脳を含む神経細胞と健康行動が殆どの版で取り上げられる。これらの課題はこの30年の間の目覚ましい医学技術の進歩によって明らかにされてきたことに依る部分は大きい。1990年の第3版では人種や性差について取り上げられているが人種差別や性差別の社会運動の影響を受けているともいえるような章が見えてくる。

Ⅳ部の社会的な課題では、どの版にも一貫して取り上げられている項目はない。1版から6版までに取り上げられた項目をあげると、ストレス、環境、文化、社会構造、家族、宗教などであり、まさに、当時の一般的な社会的な課題が取り上げられている。

Ⅴ部の介入の問題は、介入を必要とするという意味で社会病的あるいは精神病的な側面に関する課題がその一つである。具体的には リハビリ、虐待、事件（事故・自殺）、精神障害である。もう一つは QOL、余暇、学習、産業界でのパフォーマンスなどより良い生活を志向した介入に関することが取り上げられている。いずれも、全ての版にコンスタントにとりあげられているわけではなく、殆どが単発的である。

こうしてみると、Ⅰ部とⅡ部については版を重ねる流れが見えてくるが、ⅢからⅤ部にかけては特集的な取り扱いになっているので積み重ねとは言えないその時々の流れである。しかし、はじめに述べたように **Handbook of the Psychology of Aging** は「**Handbook of the Biology of Aging**」と「**Handbook of Aging and the Social Sciences**」のシリーズの中の1つである。Ⅲ部からⅤ部についての基礎的な研究の内容はむしろ他のシリーズに詳しく述べられているためである。

以上、主に目次を見ながらの素描を行ってみると、高齢者の心理学研究は、この30年間に個別的な心理現象は明らかにしてきたが、経験を積み重ねて生きてきた高齢者という人間をどう理解していくかという段階にさしかかっていることが確認でき、高齢者心理の研究は、医学で言えば「患者だけを見るのではなく患者としてみよう」という流れの中での取り組みが始まっていると言えそうである。